

1 単元 クライマックスをどう読む？～『海の命』（光村図書6年）～

2 指導の立場

＜子どもの実態から＞

子どもは、『やまなし』で作者の独特な表現や世界観に触れ、作品の魅力を捉えた。ここでは、場面を対比したり、色や自然などの情景描写の変化を捉えたりしながら、宮沢賢治が描き出した物語の世界について自分の考えを形成することができた。また、作品の魅力を話し合うことで、他者と考えを共有し、比較しながら読みを深めるよさを実感してきた。このような子どもが、作者の表現と読者が受ける主人公の行動に対する印象について話し合うことができれば、今以上に言葉のもつ意味や働きを捉えたり問い直したりすることができるだろう。そこで、単元を構想するにあたっては、次のような教材を設定する。

＜教材について＞

『海の命』は、作品の序盤で主人公太一の父がクエによって死を遂げることが描かれている。太一がクエへ復讐をするに違いないと考え読み進める読者が多いだろうが、太一はクエを殺さないのである。このようなクライマックスの描き方に対して、読者である子どもは戸惑いを感じるだろう。ここでは、クライマックスとそこに向かうまでの表現に着目し、場面のつながりや太一の描かれ方を捉えることを大切にしたい。そこで、指導にあたっては、次の点に留意する。

＜指導上の留意点＞

- 単元を貫く課題を「作者の表現は、太一の行動を納得させるものだと感じたか」と設定する。そうすることで、自分の考えを形成したり、他者との解釈のずれを話し合ったりしながら、国語科の見方・考え方を働かせることを意識できるようにする。
- 第二次では、設定した問いに対する解釈を検討する場を設定する。そうすることで、着目した言葉や文が根拠として適切であったか捉えたり問い直したりし、その解釈は適切かを確かめることができるようにする。
- 第二次では毎時間、読み方に対しての自己評価する場を設ける。そうすることで、作品のどの部分に着目し、どのように読んだかを自覚し、言葉や表現への捉えを蓄積できるようにする。

3 目標

- (1) 思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすること。また、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うことができる。〔知〕(1)オ
- (2) 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。〔思〕C(1)エ
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

4 well-being につながる学びについて

本学園では、well-being を「個人だけでなく、社会や地球環境まで含めた全体的に良好な状態」と捉えている。well-being の実現には、教科等の本質に迫る授業で身に付けた資質・能力を、人生において自在に発揮できる子どもを育成することが必要不可欠である。そのためには、エージェンシー（変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力）の育成及び発揮が重要な課題であると考えている。

本学園の国語部では、述べ方の効果や読後感の要因等を捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めていく授業が、教科の本質に迫る授業だと捉えている。また、エージェンシーを発揮している姿を、言葉への見方・考え方を働かせている学びの過程を自覚する姿だと捉えている。本単元においては、単元を貫く課題を解決するための問いを子どもと教師でつくる場を設定する。子どもと共同で見いだした問いを解決するために話し合ったり、学びを振り返ることで問いの良し悪しを判定し、問いを設定し直したりする様相がエージェンシーを発揮した姿だと考えている。

このような学習を経験した子どもは、言葉や表現の仕方の面白さに気付いたり、他者との解釈のずれを楽しんだりしながら、自身の言葉への捉えを蓄積してこれからも様々な作品と向き合うことができるようになり、well-being の実現につながるだろう。

5 指導と評価の計画（総時数 8 時間）

次	学習活動・内容	エージェンシーを発揮するための手立て	評価規準・評価方法等
一 ③	○ 話の大体をつかむ ・登場人物の行動と関係 ・場面分け ○ 単元を貫く課題の解決に向けた問いをつくる ・主人公の行動への印象 ・作者の表現への納得度	○ 問いを子どもと一緒に見いだす場を設け、子どもが話し合いで解決するサイクルを示すことで、自らが学習の主体であると認識できるようにする	[主体的に学習に取り組む態度] ノート・発言 ・主人公の行動への納得度と作者の表現の関係に着目して、問いをつくらうとしているかの確認
二 ③ 本 時 3 ／ 3	○ 太一の目指した漁師像について話し合う ・お父と与吉じいさの漁の違い ・一人前と村一番の違い ○ 太一がクエをお父だと思ったのは無理やりかを話し合う ・「打たなかった」と「打てなかった」の比較 ・クエに対する物語全体を通じた叙述のつながり ● 結末の3行があることによる印象を話し合う ・「生涯誰にも話さなかった」ことが付け足された印象 ・「もちろん」という語りの印象の違い	○ 関連作品や作者に関する資料を提示することで、教材以外にも興味関心をもって考えや解釈の根拠を探ることができるようにする ○ 班での話し合いを中心に考えを形成し、全体で考えを共有することで、エージェンシーが育まれたり、活動のよさを実感したりできるようにする ○ 振り返りで問いの見直しを行い必要ならば、問いの再設定を行うことで、学びに責任をもち、解決しようとする態度を養うことができるようにする	[知識・技能] 教科書への書き込み・ノート ・場面の様子や登場人物の言動、様子などをあらわす語句に着目し、語彙を豊かにしているかの確認 [思考・判断・表現] ノート・教科書・発言 ・太一の思いがわかる叙述を関連付けて、クエに対する思いを自分の考えとして捉えようとしているかの確認
三 ②	○ 二次で読み取ったことを基にして、作者の表現は太一の行動を納得させるものだと感じたか自分の考えをまとめる ・根拠となる語や文の選択 ・叙述と叙述とを結び付けた解釈	○ 単元を通してつなげてきた学びを振り返る場を設けることで、新たに獲得した物語の読み方を自覚し、別の作品の読みでも自ら読み深める態度を養うことができるようにする	[主体的に学習に取り組む態度] 紹介文・観察 ・太一の行動に納得できる表現になっていたかを、複数の叙述を関連付けながらまとめているかの確認

6 本時案 ー第二次・3時分ー

- (1) 主眼 最後の3行に対する解釈を話し合うことで、太一の行動や心情の表現に対する自分の考えを形成することができる。
- (2) 準備 なし
- (3) 学習の展開

学習活動・内容（発問）	予想される子どもの反応	指導上の留意点	分
1 物語の結末はハッピーエンドに感じるかどうか印象を話し合う 『海の命』はハッピーエンドだと感じたか ・ 結末の印象	ア 子どもも生まれ、母も「満ち足りた」と書いてあるからハッピーエンドだ イ 「生涯誰にも話さなかった」とあるが、その行動の意味によって本当はハッピーエンドではないのかもしれない ウ 作者がこの3行を書いた意味を話し合いたい	・ 結末に着目させることで、本時の問いに見通しをもつことができるようにする	5
2 最後の3行に対する印象を話し合う 最後の3行がないと、結末の印象はどうか ・ 「村の娘と結婚」「子ども4人」「満ち足りた」などの言葉が与える印象 「もちろん」という言葉から伝わってくる印象はどのようなものか ・ 「もちろん」と感じている人の存在 ・ 「もちろん」の言葉の働き ・ 叙述と叙述とを結び付けた解釈	ア 太一も普通の腕のいい漁師になり、周囲の人も幸せになったのだと思えた イ 今までの太一の葛藤で心が晴々したのだろうという終わり方だと感じた ウ やっぱり最後の3行があることで、太一の葛藤が続くように思えるな ア 「もちろん」と書いてあるのはなぜか。それは誰から見て「もちろん」なのか イ 太一が「もちろん」とするのは不自然だろう。これは作者の視点ではないか ウ だとすると、なぜ「もちろん」なのか。誰にも話さないことは太一にとって当然か エ 周囲から「クエは、殺して当然」と思われていたとしたら、太一は殺さない判断をしたことを話せないだろう オ 自分の気持ちを誰にも話さない決断をしたことに苦しさを感じるな	・ 最後の3行がないと仮定して話し合わせることで、この文の印象や文や言葉のもつ意味や意図を考えるという見通しをもつことができるようにする ・ 「もちろん」「生涯」「誰にも」「話さない」と言葉を区切って取り上げることで、それぞれの言葉のもつ印象と働きを捉えることができるようにする ・ 作者の視点からも言葉や文の意味を捉えることで、どのような結末にしたいと考えているのか問い直すことができるようにする	35
3 読み取ったことを基に自分の考えをまとめる 作者がこの3行を書いたことは、太一の行動を納得させるものだと感じたか ・ 主人公の行動や心情と叙述との結び付き ・ 叙述と物語に対する印象との結び付き	ア 単純な話とは違うという作者の意図を感じた。だから、「命」というつながりを太一が大切にしようとしたと感じて納得した イ クエに殺されたお父を思い続けていた太一の心情に着目すると、太一の葛藤は消えることはなく、誰かと分かち合えるものではないから、この3行があるとそういう苦しみが残っていることが分かると思った	・ 着目した部分を踏まえて自分の考えをまとめさせることで、本時での読みを自覚させ、言葉や文、表現を捉えるよさを蓄積できるようにする	45

(4) 評価規準と方法

太一のお父への思いや与吉じいさに教わったことを関連付けながら、「もちろん」「生涯誰にも話さなかった」という言葉の意味を捉えたり問い直したりして、この文の印象について、自分の考えを形成することができたか、発言やノートの記述からみとる。

<メモ>